教育の必要性

中垣 尚子
パキスタンカラチ在住

2022 年 **4** 月 **7** 日、私は、日本人学校の教師としてパキスタンカラチのジンナー国際空港に着いた。最初に目に飛び込んできたのは、空港を護衛しているセキュリティーガード。なんと手にはライフル銃をもっていた。カラチの治安が良くないことは聞いていたので、私も安全上の理由から専属の運転手を雇い、車窓には黒いシェードを貼り、ボディーガードをセットでつけることにした。
まるでハリウッド女優張りの生活が、赴任早々始まるとは思ってもみなかった。

ジンナー国際空港

ちなみに、このようなセキュルティーセットは、カラチでは特別なものではなく、多くのお金持ちのパキスタン人が当たり前に使っているということだった。好きに出歩くことができない不自由さはあるが、こうすることで、外国人も安全に過ごすことができている。

パキスタンの正式名は、「パキスタン・イスラム共和国」。イスラム教が国教だ。お祈りを始めとするイスラム文化が日々の生活の中に浸透している。イスラムに関わる祝日や行事が多い。祝日は、月の満ち欠けによって日にちが決まるので、今でも肉眼で月を確認している、そんなアナログなパキスタンが愛らしくて好きだ。
イスラムには施しの文化があり、パキスタンの人々はおもてなしの心にあふれ、とても優しい。病院や学校にも巨額の寄付が集まる。単身の女性や外国人の私にもよくしてくれる。しかし、そんな私だからこそ、困ることや不便もある。当初、私はスパイ容疑でビザが出なかった。「女性が単身で外国までわざわざ働きに来るなんて怪しい。きっと他の目的があるに違いない。」という理由だったそうだ。

カラチはパキスタン最大の商業都会。出稼ぎでパキスタン中から人が集まってくることから肌の色や顔、年齢層、大富豪から貧困層まで、あらゆる種類の人の生活を見ることができる。

カラチ市内のモスク

今までに見たことがないお金持ちの世界も見せてもらった。豪華なパーティーで給仕しているメイドは透明人間のようで、お金持ちの彼らの眼中にはない。メイドの識字率は低く、全てを暗記している。そんな暗記力のいる生活は、今の私には考えられない。大量の情報を記憶している彼らを尊敬している。

でも、そんな「職業＝人の価値」になっている社会に疑問を感じる。が、現実は、「理不尽」や「不公平」が当たり前。モヤモヤすることが多い。その一方、メイドの子どもたちを学校に通わせる雇い主もいる。パキスタンを何とかしたいと頑張っているパキスタン人もいる。モヤモヤをパワーに変えて、前進している人たちがいる。

豪華な結婚式

内閣府の「世界青年の船」事業（**2001/10-12**）に参加したり、**JICA** 青年海外協力隊（**2011-13** キルギス）を経験したり、世界のことを知った気がしていたが、それでもパキスタンは多くの衝撃を私に与えてくれている。
私がその中で感じたのは教育の必要性。世界中の人々がそれぞれの能力を発揮できる教育があれば、今の世界はもっとよりよい世界になるからだ。
パキスタンは無限の可能性を秘めている。

Reflection

2001 年夏「高知希望工程基金会」（**KHPF**）主催のスタディツアーに参加し上海、北京、安徽省、青海省を訪問。特に、標高 **3400m** にある青海省草原村草原小学校で聞いた教育省の方の言葉に心が動いた。
『ここに住んでいる人たちは一生をここで終える。通信機器もないここでは、あなた達外国人と会うのは初めて。あなた達のような人種が存在することも知らなかったでしょう。そして、同じ中国でありながら、北京のような都市があることすら知りません。いろんなことを知らず、この村での生活が全てだと思って、人生が終わる。北京のような場所があることを知れば、そこに行きたいと出ていく子どももいるかもしれない。いろんな世界を知る機会があれば、もっといろんなことにチャレンジしてみようという子どもが出てくるはず。だから、知ることはとても大事なんです。だから、教育を受けて知る機会を作らなければいけない。学校が必要なんです。』
この言葉を聞いて、教育が子どもたちの可能性を広げることを強く感じ、教育に携わりたいと思った。あのスタディツアーに、あのタイミングで参加し、あの場所で、あの出会いがあった。青春の点が線でつながり、私の **1** つのターニングポイントとなった。

KOCHI IYEO HP

2024 年 **7** 月 **20** 日発行
発行者
高知県青年国際交流機構
（**KOCHI IYEO**）
会長 前田正也
090-9552-0022
xiwang@yacht.ocn.ne.jp